

ふたたび鳴り始めた村の心音

「トンカラリ、ドンドン」

初めて聞いた機織りの音は、心臓の鼓動のようだった。

日本海から東へ十九キロ。新潟県の最北、村上市山熊田は十七軒四十三人の小さな村だ。山にぐるりと囲まれ、村の真ん中には清流が流れる。隣の集落までは八キロ。公共交通機関もなく、最寄りの駅や病院、スーパーなどは車で三十分ほどかかる不便なところだ。そこで私は暮らし、機を織っている。

滅んだと思っていた山の暮らし

そもそも、なぜ私がこの山奥にいるのかといえば、



山熊田の冬 豪雪地帯ゆえの雪下ろしは、道が雪で埋まってしまうため、村一斉に行う

「マタギと飲み会しようぜ」と友人からの誘いに乗ったのが始まりだった。

そこで見たのは、私たちの原風景であるはずの原始的で未知に溢れた暮らしぶり、高齢化が進む村の暗い行く末だった。興奮と動揺が動力源となって、私は通い始めた。六年前のことだ。

当時私は、東日本大震災をきっかけに、生き物としての「ひ弱さ」をごまかせず、電気に依存してきた自分を恥じてさえた。そんな時だった。もう滅んだと思っていた山の暮らしが、電気や石油がないなら生きていける自然との共存が、ここには現役で息づいていた。

衝撃だった。周回遅れが、結果的に最先端とさえ思ってしまった。人々はおおらかで、私はすでに家族なのではと錯覚するほどの距離感で仕事を教えてくれる。私が移住を決めた理由は、この山の暮らしを学び、生のまま後世へ繋げたい、ここにはそれだけの価値がある、それは村の存続にもつながるのではないかと、そして私自身もまだ間に合うのでは——と考えたからだ。お世話になった家では、昼夜問わず、隙あらば婆が作業をしていた。何かの繊維を割き、捻ってはつないで、ロングのアフロのように、ひたすら長い一本の糸を大きなカゴにモサツと貯めていく。

達成感もなさそうな地味な手仕事は、シナの糸績みだという。村には工房があつて、覗くと三人の婆が黙々と織っている。どうやらこの村には、マタギだけでなく、シナノキなど、木の皮から布を織る伝統もあるらしかった。

結果、私はその家に嫁ぐことになり、本格的に山の暮らしが始まった。山の仕事のほとんどは家単位で行われているから、通いでは表面をなでるばかりで限界があった。

一年の仕事のルーティンは決まっっていて、牧歌的と

おおたき・じゅんこ●1977年埼玉県生まれ。アート、パフォーマンス、文章などで表現活動を行ってきた。新潟県村上市山熊田のマタギを取り巻く文化に衝撃を受け移住。小誌2018年5月号から約2年、「マタギの村から」を連載した。